大人の
社会科見学

伝統を受け継ぎ、
職人とともに歩み続ける江戸箒老舗の物語

時代に媚びず、抗わず 技術をつないでいく

株式会社 白木屋中村傳兵衛商店　　代表取締役 中村 悟さん

受け継がれる伝統の技が凝縮された「江戸箒」は、職人の手で一本一本ていねいに作られていく。

創業は天保元年（1830年）。歴史を感じさせる看板が店の目印。

古来、箒には神が宿り、掃き清めるという行為は神聖なものとされてきた。今回の主役は逆境を生き抜いた江戸箒。老舗の復活劇である。

東京・京橋に店を構える白木屋中村傳兵衛商店は天保元年（1830年）創業。中村 悟さんが勤め先に辞表を出し、7代目を継ぐと決意したのは、昭和から平成へと時代が変わる頃だった。掃除機の登場で、箒はすでに片隅に追いやられていた。雑貨の商いで苦境をしのいだものの、それも100円均一の店に市場を奪われ、職人も抱えられなくなった。

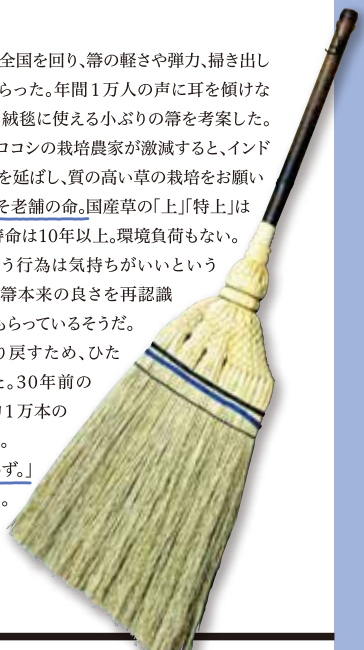
江戸っ子には意地がある。箒は技術の宝庫。「やめるのはもったいない」と原点回帰を決めた。真っ先に職人を呼び戻した。技の中核は草選り。柔らかさとコシの強さで、20種に選別する。3年で1,000本作ると、指先で草の違いがわかるようになり、さらに3年で質の高い箒である「特上」の草を見極めるという。熟練技が編み上げた箒には弾力がある。そして、職人の給与が売上げを上回っても、「あなたは貴重な種」と意に介さなかった。その後種は芽を出し、後継も育っている。

デパートの催事で全国を回り、箒の軽さや弾力、掃き出しやすさを実感してもらった。年間1万人の声に耳を傾けながらファンを増やし、絨毯に使える小ぶりの箒を考案した。材料となるホウキモロコシの栽培農家が激減すると、インドネシアの奥地まで足を延ばし、質の高い草の栽培をお願いした。クオリティーこそ老舗の命。国産草の「上」「特上」は2万円を超えるが、寿命は10年以上。環境負荷もない。何よりも「掃く」という行為は気持ちがいいという達成感が得られる。箒本来の良さを再認識した方々に購入してもらっているそうだ。

失った市場を取り戻すため、ひたすら走り続けてきた。30年前の10倍、今では年間約1万本の江戸箒を売るまでに。

「時代に媚びず、抗わず。」

老舗の底力を感じた。



株式会社 白木屋中村傳兵衛商店
〒104-0031　東京都中央区京橋3-9-8白伝ビル1F
電話 03-3563-1771（フリーダイヤル 0120-375-389）　ホームページ https://www.edohouki.com/

三沢明彦（みさわ あきひこ）
1956年生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業後、1979年読売新聞社入社。社会部記者として活躍し、北海道支社編集部長、写真部長、編集局次長を歴任。その後、旅行読売出版社常務取締役編集長、福岡放送常務取締役（報道、制作担当）、静岡第一テレビ常務取締役（編成、報道、制作担当）、現在は静岡第一テレビ顧問。